豊頃町「報徳のおしえ」推進会議『ひろめよう！報徳の町に四つの心』

『報徳のおしえ』とともに

令和3年度「報徳のおしえ」講演会《中桐万里子氏講演》

講演テーマ ～「報徳」からはじまる豊かな未来創造～〈その9〉

〈前号の続き〉

このように考えてみると、どんなものにも必ず生き様のようなものが宿っていて、ここにはじまりがあって時間が流れている。そういった色々なものと繋がりながら、私たちはここに生きている。そんなことがはっきり分かるのではないでしょうか。

この『報徳訓』は大きく二つに分かれているのです。一つ目は、最後の一行までの部分なのです。その場所はいったい何を意味しているのかというと、私たちは心の目を開いて、現実と徳と、そこに宿っている様々な仲間たちとの「創造や創出」を築こうじゃないかという呼びかけなのです。

今、肉眼で見えている世界。それは全てただのものです。しかし、その中にはたくさんの現実が色づいている。多くの人たちとの関わりが、そして、目には見えなくなったたくさんの時間が流れている。生き様が宿っている。愛情が宿っている。思いが宿っている。そのことに改めて考えようじゃないかと呼びかけています。

心の目で見るときに、この日常や現実、そして自分自身というものが、まったく違って見えてくるのではないか。心の目を開き、現実と出会っていく。徳と出会っていく。それを『心の田んぼを耕すことだ』というふうに呼びました。心の目を開き、心の田を耕すことからはじめようじゃないかと。それが今日の午前中にあった探検記念日125回目、というそんな行事にも表れていると思うのです。

つい私たちは、毎日の仕事で日々一生懸命になってしまいます。ああだこうだと、色々な愚痴が出てくることだってなくはありません。でも考えてみるとすごいのです。125年前、原野だったその場所に立って、この地に住もうと決めた人たちがいる。そして、その地を懸命な思いで切り拓いた。本当に歯を食いしばりながら、この町を作り上げてきた。その時にどんな思いを宿していたのか、どんな風に生活をしていたのか目では見えません。でもその人たちに思いを馳せてみる。町の誇りに、私たち自身のはじまりに、私たちの田んぼのはじまりに、私たちの家のはじまりに、色々なはじまりに戻った時に見えてくるものがあります。心がぽかぽかと、熱くなるのを感じるのではないでしょうか。正にそれが前半の「報徳訓」に描かれている世界です。どんなにありきたりに見えても、そこには必ず生き様が宿っている。もう一度心の目を開いてみようじゃないかと、そう呼びかけたのです。

そして二つ目の部分は、とても大事な最後の一行ということになります。その心の耕しをしたうえで、最後に一行をしっかり肝に命じて欲しいと

『年々歳々　報徳を忘るべからず』

これは前半とは全く違うことを意味しているのです。つまり私たちが沢山受けてきたもの、私たちの中に一杯宿っているものに目を向けるのではなく。今度は自分自身が動き出そうというそんな呼びかけになっているのです。

『年々歳々　報徳を忘るべからず』

報徳というのは、こうやって受けてきた徳に、どうやって報いることができるのか、どうやって恩返しをすることができるのか。そのことを考えて欲しいということなのです。

私たちが先祖たちから引き継いてきたものだからこそ、今度は私たちが働いて未来へと引き継いでいく。そんな恩返しの仕方もあるかもしれません。その思いを持ってこそ、田んぼや畑、あるいはそれぞれの実践現場、あるいは社会づくり、町づくり、そのことに歩みだそう。と呼びかけたのが金次郎だったということになります。

もちろん心を耕すこと。自分が多くの人に助けられてきたり、多くのものを受けてきたり、大勢の人達に支えられてきたことに気づくこと。それはもちろん大事なことなのです。

本当に大事なのは、最後の一行。

だからこそ『年々歳々　報徳を忘るべからず』その場所が本当に大事な、最も言いたい最後の一行なのだろうと思うのです。

ポイントは、土を知ること。はじまりを知ること。しっかりと根を張ること。自分のルーツを知ることではなくて、その次にあることではないかと思うのです。つまり、それを知りながら自分自身の花をどうやって咲かせることができるのか。そこに力を尽くしていくことなのではないかと思うのです。大事なのは、この花を咲かせる。自分に何ができるかを考える。自分自身がどうありたいのか考え、そのように力を尽くすことなのではないかと思っています。

今、まさに東京オリンピック。

選手の皆さんはオリンピックで楽しんでプレーしたいと、楽しんで競技をやりたいと、そんなふうに言います。でもそれは、決して楽な道のりであるはずがありません。毎日もの凄い苦労や努力が、懸命な汗があったりするわけです。それでも彼らは、自分自身の花を咲かせようとしている。そして実際にプレーが終わるとよく言うのです。本当に多くの人たちに支えてもらった。家族がいたから、コーチがいたから、仲間がいたから、そしてファンの人たちが支えて下さったからだ。ケガをした時のドクターが、一生懸命治療してくださった。選手たちが、なぜあの舞台で花を咲かせることができるのか。それは、しっかり自分の土を知っている。ルーツを知っている。自分が誰と、どんなものと繋がりながらここにいるのかを知っている。

だから、何とか恩返しをしたいと思った。何とかこの思いを伝えたい。恩返しをして、今度は自分が感動を伝える側になりたかったと。そんなふうに頑張っている。有難い有難いと、自分が助けてもらう側で終わるのではなくて、今度は自分なりの花で、多くの人たちを喜ばせていく。感動を与える側になっていく。生み出す側になっていく。そんな場所にこそ「報徳」つまり受けてきた徳に報いようとする。恩返しをしようとする。その気持ちや行動が表れてくるのではないでしょうか。

彼自身（金次郎）は、『年々歳々報徳を忘るべからず』ということを、とても大切な一文として刻み繰り返した。家族たちや仲間たちにも繰り返しこれが大切なことだと伝えていました。

『年々歳々　報徳を忘るべからず』

選手たちは有難う有難うという側で終わるのではなく、有難うを生み出していける側になる。有難うと言われる側になっていく。そんな場所にこそ本当の誇り、本当の誇らしさがあるのではないか。だから徳に報いる行動を忘れてはいけないと、そんなふうに言うわけです。

彼らは、幸せになるために頑張るわけじゃない。選手たちが毎日毎日頑張っているのは、幸せになるためだというふうに考えるのも、確かに一つのやり方かもしれない。「幸せになるために頑張ろう」というふうに幸せを遠い目標に置いて、一生懸命それに向かって努力をする。ということも一つかもしれない。

しかし、報徳のやり方はそれとは少し違うのだと、彼（金次郎）は言うのです。

むしろ幸せになるために頑張る。幸せを目標にして頑張るのではなくて、幸せだから頑張る。幸せを感じて頑張る。そんなふうに、幸せを糧にして頑張るということなのじゃないだろうかと言います。

私たちは、ついつい幸せを青い鳥のように、どこにあるのかわからないもの、あるいはめったにお目にかからないものと思いがちです。でも心の目を開けば意外と身近にある。意外とすぐ近くにある。そしてそれらに背中を押されるようにして、もう一歩先へと頑張って行けたりする。

幸せになるために頑張るのではなくて、幸せだから頑張る。幸せを感じて頑張る。それが徳を受けながら徳に報いていくそんな「報徳」という言葉に宿された意味合いではないかと。

そのためにも何といっても、私たちはまず心の目を開き、心田を耕し様々な生き様にしっかりと結びつき、出会っていることが大事なんじゃないでしょうか。

それこそが目に見える世界。田畑、現場、実践、町、それらのものを息づかせていく大切なエネルギーになるのではないか。そんなふうに考えているわけです。

それが昨今の言葉でいうならば、『道徳と経済』と言うような言葉になるでしょうか。

つまり道徳それこそが、私たちの生活を豊かにしていく。そして私たちが幸せに気づいていく。幸せに出会っていく。自分たちが本当に満ちている者だと知る。そんな幸福感・充足感が原動力になって、経済つまり日々の生活・仕事・くらしに人間が出ていくことができる。そうなれば私たちにとって仕事は、生き生きとしてくる。その考えを持ったのがこの報徳の考え方。「道徳と経済」が一体になっている考え方だったといわれています。

そのことから彼（金次郎）は繰り返します。荒地は荒れ地の力でこそ蘇っていく。村は村の力でこそ蘇っていく。重要なのは村人一人一人が主役であるということ。村人一人一人が主人公であり担い手であり、力を持ち生み出すその力を持っているということなのだと。

金次郎が救った村は、600か村ではありませんでした。《続く》

問合せ先
教育委員会社会教育係　☎579-5801